

活動後の表現活動

生活科の学習では、体験活動と表現活動とが繰り返されることで子どもの学びの質を高めていきます。

右の図のように、活動や体験は教師の指示からではなく、子どもの思いや願いから始まらなければなりません。一方、活動や体験の中で子どもは没頭したり夢中になったりしているため、すぐに「書きたい」「発表したい」という思いになります。じっくり変化を感じたり、「なぜだろう」と考えたりして、合間を適切に確保することで、伝え合ったり振り返ったり表現したいという状況が生まれます。

①思いや願いをもつ

②活動や体験をする

③感じる・考える

④伝え合う・振り返る

《生活科の学習過程の基本》

①～④は順序よく繰り返されるものではなく、順序が入れ替わることもあるし、複数のプロセスが一体化される場合もあります。

ここが
ポイント

伝え合い、交流する場を工夫する！

伝え合い、交流する活動は、集団としての学習を高めるだけでなく、子ども一人一人の気付きを高めていく上でもたいへん有効です。

例えば、「こうすると雪がよく固まるよ。」「こっちにある雪がよく固まったよ。」「こうするとよく滑るよ。」など、自分が発見したことと友達が発見したことを比べ、似ているところや違うところを見付けます。そして、「今度は自分も試してみよう。」「こうしたらどうなるかな。」とやりたいことが明確になり、次の活動へつながっていきます。

友達同士の交流だけでなく、幼児をはじめ異学年や地域の人などに、体験したことや調べたことを伝える活動を位置付けることもできます。自分たちがつくったスノーランドについて、遊び方やルールを相手に伝える活動、または、地域のスノーフェスティバル等で教えてもらったことなどを実践し、できたことや感想などを教えてくれた方に伝える活動なども考えられます。このような活動では、伝えたい気持ちが高まる一方、うまく伝わらなかったことから自分の足りないところに気付き、次の活動が明確になることもあります。また、身の周りの人から称賛されることにより、意欲の向上が図られることもあります。

このように、相手意識、目的意識などが子どもの学習を促進することにつながります。

ここが
ポイント

振り返りを大切にする！

活動後には、振り返り、表現する活動を位置付けることが大切です。それは、活動や体験したことを言葉などによって振り返ることで、無自覚だった気付きが自分の中で明確になったり、それぞれの気付きが関連付けたりすることが可能になるからです。

しかし、活動や体験が不十分で気付きが曖昧なまま振り返ることがないように気を付けます。子どもたちが達成感をもったり、気付きを頻繁に伝えようとしたりしている状況が生まれている必要があります。

子どもたちは、表現することで自らの活動や対象を見つめ直したり、過去のことや周りのことと比べたりして気付きの質を高めていきます。「今日は雪だるまが作りやすかったよ」「晴れた日、あたたかい日は作りやすいよ」などと、体験したことこれまでの体験につなげて表現することができます。ここでの気付きは、それまでの気付きと関連付けが図られた、より確かなものになっていると思われます。

子どもが表現する活動を行う際には、教師の関わりも大切になってきます。子どもの気付きを認め、共通の視点に気付かせたり、つないだりしていくことで、子どものイメージはどんどん広がっていきます。

Active

振り返る際は、カードを活用するとよいです。教師が活動から見取ったこと、感じたことを基に励ましたり、次の活動への示唆をしたりすると効果的です。

できれば、教師のコメントを書きましょう。子どもと対話をして即時評価(コメント記入)できればBEST！でも、なかなかできない場合もあるでしょう。

そんな時は、教室の掲示板や板段ボールに貼るとよいです。教室環境の中にカードを位置付けていくことで、他の友達が読んで交流し合ったり、称賛したりする場が自然に生まれます。

意図的に友達からの感想を付箋などに書き、貼ることも工夫の一つです。